

経済力かイングリッシュネスか

— 『人の金を当てにするイングランド人たち』におけるユダヤ商人の娘たちの選択—

奥山 厚子*

Economic Power or Englishness: Choices Faced by a Jewish Merchant's Daughters in *Englishmen for My Money*

Atsuko OKUYAMA

抄 録

1590年代は、外国商人の追放とSteelyardの閉鎖があり、排外感情の高まりと共に、演劇では外国人の登場人物が増えた時期である。しかし排外感情にも徐々に変化が見られ、1590年代後半になるとあからさまな敵対心は薄れ、ステージ上の外国人たちは、次第にからかいの対象となっていく。本作品ではポルトガル系ユダヤ人のピサロの娘たちは、父の薦める外国人の金持ちとの結婚よりも、借金が返せず、担保の土地をピサロに取られそうになっているイングランド人との結婚を望む。混血の娘たちが父親のピサロの血統よりもイングランド人の母親の血統を重視し、尚且つイングランド人との結婚を望んだことから分かるように、イングランドの優越はゆるぎないものであることが劇の基調となっている。そのような中でピサロはイングランド人の優越を確認するために利用されているに過ぎず、旧来の価値観によるステレオタイプのユダヤ人金貸しとしての役柄から脱却しきれていない。そこにはロンドンの経済的ハイブリッド化に対するイングランド人の嫌悪、土地を中心とした封建主義的経済が、外国資本の流入による経済構造に取り込まれてゆく事に対するイングランド人の拒絶感が存在する。

キーワード：イングリッシュネス、王立取引所、ユダヤ人、マラーノ、デニズン

1. はじめに

『人の金を当てにするイングランド人たち』(*Englishmen for My Money*)は、ウィリアム・ハートン(William Haughton, ?-1605)によって1598年に書かれた市民喜劇である。⁽¹⁾ 1590年代から1600年初期は、外国商人の追放とスティールヤード(Steelyard)の閉鎖があり、演劇では外国人の登場人物が増えた時期である。ステージに増えた外国人は反外国人の感情の高まりと一致している。しかし排外感情にも徐々に変化が見られ、1590年代後半になるとあからさまな敵対心は薄れ、ステージ上の外国人たちは、次第にからかいの対象となっていく。本作品で

* 名古屋女子大学非常勤講師

は、ポルトガル系ユダヤ人のピサロ (Pisaro) の娘たち、ローレンシア (Laurentia)、マリナ (Marina)、マテア (Mathea) が、父の薦める外国人の金持ちとの結婚よりも、借金が返せず、担保の土地をピサロに取られそうになっているイングランド人、ハーヴェイ (Harvey)、ハイアム (Heigham)、ウォルグレイヴ (Walgrave) との結婚を望む。外国資本の流入に伴う社会構造の変化が問題となった時期の劇であるが、娘たちの結婚にはイングランドの人々の自国意識の高まりを見ることができると捉え、王立取引所 (Royal Exchange)⁽²⁾ をその中心的な存在とし、ロンドンおよび近隣諸国の地名を挙げ、それに纏わる歴史上のエピソードを基に作品との関わりを論じたもの (Alford 38-49)、1590年代に数多く生まれた外国人が登場する演劇と本作品との関連において排外主義的な要素を比較したもの (Hoenselaas 53-62)、セクシュアリティの面から彼女たちの結婚はロンドンの混血化に繋がり、国家的な完全無欠さへの脅威を本作品は表現していると捉えるもの (Smith 165-78)、ピサロをデニズン (denizen) の一人と捉え、娘とイングランド人との結婚の意義を論じるもの (Stewart 55-81) などがある。いずれも経済システムが大きく近代化した時代背景をその中に読み解くものであるが、外国人の求婚者たちはなぜ、オランダ人、フランス人、イタリア人なのか、また彼らはなぜイングランド人たちのライバルなのか、そしてピサロはユダヤ人であると明確に作品中では述べられていないが、彼はそれまでの劇に登場するユダヤ人金貸しとどう違うのかについて、なお考察の余地があると考えられる。

『人の金をあてにするイングランド人たち』では、軍事力のみならず、経済的側面や、英語という言語からも、イングランドの優越はゆるぎないものであることが劇の基調となっており、そこには土地を中心とした封建主義的経済が、外国資本の流入による経済構造に取り込まれてゆく事に対する拒絶感が存在する。イングランドの優越が最もよく現れているのがピサロの娘たちが誇りとする美しい英語であり、それは彼女たちが守ろうとするイングリッシュネス (Englishness) の根幹をなすものである。また彼女たちの結婚には、ロンドンの経済的ハイブリッド化を防ぎたいとのイングランド人の感情が現れていることを論じたい。更に、ピサロは王立取引所を仕事場とし大きく変革した国際金融システムに関わる貿易商人であるが、彼の役柄は、イングランドの優越を示すことであり、旧来の価値観によるステレオタイプのユダヤ人金貸しと根本的に大きく変わるわけではないことを明らかにする。

2. 混血の娘たちの完璧なイングランド人への憧れ

劇出だしの独白でピサロは自身のことを、“by birth I am a Portingale, / Who, driven by western winds on English shore” (1.1.11-12) と述べている。1580年、ポルトガルがスペインに併合されると、ユダヤ教徒たちは厳しく追及され、彼らは隠れユダヤ教徒マラーノ (marrano)⁽³⁾ として海外へ移り住んだ。ピサロもそのような一人であったと思われる。彼の独白からは、32隻の船を所有し、手広く貿易商を営んでいることが分かる。続いて彼は自身の仕事について次のように述べる。

And by the sweet loved trade of usury,
Letting for interest, and on mortgages,

Do I wax rich, though many gentlemen,
 By my extortion comes to misery:
 Amongst the rest, three English gentlemen
 Have pawned to me their livings and their lands, (1.1.17-22)⁽⁴⁾

ピサロは“trade of usury”というように、利付き貸しを行っている。彼にとってそれは“sweet loved”であり、金銭そのものを取引の対象とすることに戸惑いはない。イングランド人相手に富を増やしているというが、中でも娘たちが結婚しようとしている三人のイングランド人は土地を担保に彼から金を借りており、借金が返せなければ土地はピサロのものになる。外国由来のピサロにイングランド人の資産が脅かされているのである。

当時ロンドンの繁栄は外国からの投資によって支えられていた。大陸での宗教戦争を逃れて来た者も多くいたが、手工業に携わる者や商人も多く在住した (Alford 116-21)。娘たちの求婚者として、フランス人のデリオン (Delion)、イタリア人のアルヴァーロ (Alvaro)、オランダ人のヴァンダル (Vandal) が登場する。彼らは当時のロンドンにおいて代表的な外国人グループに属する人たちである。⁽⁵⁾ ピサロにとって娘たちを資力のある外国人たちに嫁がすことは商売拡大のチャンスであり、彼は娘たちの結婚を通して資産の拡大を図ろうとする点では、それまでのルネサンス演劇に登場する父親たちと共通する思惑を持っていると言える。

ヴァンダル、デリオン、アルヴァーロたちはピサロの使用人たちにどのように見られているのであろうか。ピサロの使用人であるフリスコ (Frisco) はフランス人について、“pigs and Frenchman speak one language, ‘awee awee.’” (1.1.173-74)、またオランダ人については、“Nay, I must have my mouth full of meat first, and then you shall hear me grumble it forth full mouth,” (1.1.181-82)、イタリア人はというと、“Marry by these three points: a wanton eye, pride in his apparel, and the devil in his countenance.” (1.1.192-93) と表現する。フランス人は豚が鳴くような単純な言葉しか話せない。オランダ人はマナーがなっていない。イタリア人は色情のある目をして、服に拘り、こわい顔をしていると、いずれも否定的に評している。

使用人のフリスコもまたフランス人が話す英語は、“a clipper of the King’s English, and to conclude, an eternal enemy to all good language.” (1.2.80) であるとする。フリスコの英語もイングランド人と遜色無い。彼は、端折ったような King’s English はすべての正しい言語への敵と考えている。ピサロもフリスコも生粋のイングランド人ではないが、英語がイングランド人と遜色が無いことから、劇中での立ち位置はイングランド人のそれに近いといえる。

三人の娘たちは外国人の求婚者たちについてどのような印象をもっているのだろうか。ローレンシアは食事後の外国人たちの会話を聞いて、Dutch-French terms (2.3.3) は田舎くさく、口籠もったようであると、不快な様子である。またマリナはイングランド人の求婚者たちの英語と比べて外国人の求婚者たちの英語は“a mouse in cheese” (2.3.31) のようにはっきりとしない発音であるという。ローレンシアは、“… you must learn sweeter English or I shall never understand your suit.” (2.3.125-26)、また、“If needs you marry with an English lass, / Woe her in English, or she’ll call you ass.” (2.3.159-60) と求婚の資格に正しい英語が話せる事を繰り返し挙げている。第二幕で外国人の求婚者たちは、父の招き入れにより娘たちと出会い、おかしな英語で娘たちに最大級の賛辞を送るが、娘たちは、彼らが英語を正しく話せないことに嫌悪感を持つ。ローレンシアは英語が正しく話せないヴァンダルのことを“the devil” (2.3.193) と呼ぶ。英語の習熟度は女性たちにとって教養の程度を判断する基準となっている。

彼女たちの感覚としては外国人であっても正しい英語が話せることは必須なのである。娘たちはイングリッシュネスを守るために、英語をただ母語として日常的に話すだけではなく、教師から正しい英語を学ぶ努力をしている。彼女たちはイングランド人であることに誇りを持ち、英語という言語をイングランドの栄光を示すものとして保持する努力をしているのである。

反対に外国人たちの英語を揶揄している三人の娘たちやピサロの使用人たちが、英語以外の言語を習熟していたとは言い難い。ピサロは外国人たちを“My son, Alvaro, and Monsieur Delion, / I know, doth know the way exceeding well.”(2.3.270-71)と婿に迎える気満々である。彼女たちは切羽詰まってアンソニー (Anthony) に助けを求める。彼は彼女たちが脱出する手助けをする。彼女たちは父親が寝ている間に変装して、イングランド人たちと駆け落ちしようとする。アンソニーとフリスコは敵地に目に付かず入り込むために偽装することを思いつく。アンソニーの場合はフランス語が不十分ではなく偽装において万事休すであった。フリスコもおかしなオランダ人を作り出したただけであった。アンソニーやフリスコが不完全な外国語で偽装することは、外国人たちが英語を正しく話せないことと同じ事なのである。

英語の発達に大きく寄与したのは、印刷技術、ルネサンスと宗教改革、そしてエリザベス朝に文学が開花したことである。まず、印刷技術の導入により本は一般の人々にとって身近なものとなった。また首都ロンドンの政治的・社会的重要性が増し、ロンドン英語は標準の英語としての地位を築いていったのである。次にルネサンス運動がイギリスにも波及し、ギリシャ・ローマの古典が次々と英語の訳されるようになった。宗教改革を期にローマ・カトリック教会の言葉であるラテン語よりも自国語を通して聖書を読もうとする機運が高まり、イギリスにおいても聖書の翻訳が相次いだ。⁽⁶⁾ それに加えて、シェイクスピアをはじめとするルネサンスの大作家たちがエリザベス朝文学を開花させ、語彙が増大して、多様な芸術的表現が可能となった英語は、もはやヨーロッパの西の端の島国の田舎言葉ではなく、誇るべき言語である地位を確立した。

やがてロンドンにおける中産階級の商人と貿易商人の経済活動に伴い、ロンドンの英語が全イングランドに広まった。海外進出の拡大は、英語が世界中に広まる礎となった。イングランドの自信は英語の広がりとともに深まってゆくことになる。イングランド人らしさについて劇中で繰り返し述べられる言葉への言及は、ホートンが本劇において、アイデンティティの根底を成すものについて、言語を重要視している事の表れである。三人の娘たちの英語への強い拘りは、イングランド人としての誇りを、軍事や経済面だけではなく、文化的側面からも押し出すものである。

3. 完璧なイングランド人への憧れ

The Three Lords and Three Ladies of London (Robert Wilson 1590)、*Sir Thomas More* (c1591) は強い愛国心と排外感情が支配しているように、アルマダの海戦 (1588) でスペインに勝利した後、スペインへの優越が劇の中でも誇示されるようになった。軍事における勝利はイングランドの力による優越だけではなく、国民的誇りの高まりにも繋がった。劇中ではMoorが、スペインに自分たちの船が襲われた (“The Spanish galleys have beset our ships.” (1.3.203)) と述べる場面があり、ホートンはアルマダ勝利の栄光を取り入れることを忘れてはいない。しかし*Englishmen for My Money*では、諸外国への挑発的な色合いは薄れ、コミカルで伸びやかな

笑いで、外国人たちのことを笑劇化する一面も持ち合わせている。*The Three Ladies of London* (Robert Wilson 1581) のMercadoreのひどい英語は彼の邪心を際立たせていた。*Englishmen for my My Money*では求愛において、奇妙な英語はコミカルさを高めている役割を果たしており、外国人たちを悪党だと印象づける狙いはない。イングランドの人々の自信が劇作品にも現れていると捉えることが出来る。

本劇では外国人とロンドンの人々とのあからさまな軋轢のエピソードは少ないが、その一つに次のものがある。アルヴァーロがピサロの家に侵入しようとしているとHeighamは、“What a pox! Are you mad or drunk? / What, do you mean to break my glasses?” (3.2.38-39) とここに住んでいるガラス職人あるいはガラスを売る人を装い怒鳴りつける。この争いは1575年、9月4日にCrutched Friarsでガラス製品を作っていた工場が焼けた時のロンドン在来の職人と、移民の職人との軋轢をモチーフにしたものであるという (Kermode, *usury plays* 226)。スティールヤードはハンザ同盟の商人たちのロンドンでの拠点であった。倉庫、チャペル、ギルドホール、住宅などが存在し、独自のコミュニティを持っていた。ロンドンの商人たちの繰り返しの要求により、エリザベス一世は自国の織物産業を保護するためにハンザ同盟をロンドンから追い出した。このエピソードは外国商人を嘲ることによりハンザ同盟への勝利を祝っていると捉えることも出来る。スティールヤードの閉鎖はロンドンの商人の自国民意識の高まりと関連する象徴的な出来事であった。

1595年はエリザベス朝で外国人への不満を原因とする暴動が起こった最後の年である。不和はあったが、平和裏に外国人とロンドンの人々は暮らしていた、それに伴い、外国人に対する暴動を題材としてのドラマは陰を潜めていった (Hoenselaars 53)。演劇では1590年代から1600年初頭にかけて外国人の登場人物が著しく増えた。1590年代後半になると外国人の登場人物は脅威の存在からコメディに移行した。*Sir Thomas More* (1592) では脅威として捉えられていた外国人も、本作品では排除の対象ではあるが、脅威としては捉えられていない。外国人に対しては敵対するのではなく、笑いの対象としているのはイングランド人の自信の表れではないだろうか。逆にイングランド人たちは自分たちを笑いの対象とする余裕さえ見せている。フリスコはオランダ人のコートでピサロに家に閉じ込められている娘たちを逃がすために盗もうとするが、それは成功しなかった。聴衆はフリスコがオランダ人ではないことを知っている。フリスコはイングランド人であり、求婚者がフリスコを拒否したことは皮肉である。オランダ人の格好をしていたからではあるが、イングランド人たちは図らずも彼ら自身の国の人を拒絶したことになる。ホートンは上辺だけ見た外国人への感情をドラマ化しているのである。茶化されているのは外国人たちのみならず、イングランド人たちもまた同様である。

本作品では男女間、外国人とイングランド人間で成りすましが何度か行われている。次の引用はマテアが、彼女のイングランド人の求婚者ウォルグレイヴがフランス人のデリオンに偽装しているのを見て嘲笑する場面である。アイデンティティを偽装することで本音を話すことが可能となる一面がある。

Mathea. Hear you Frenchman, pack to your whores in France.
 Though I am Portingale by the fathers side,
 And therefore should be lustfull, wanton, light,
 Yet Goodman goose-cap, I will let you know
 That I have so much English by the mother,

That no base slaving French shall make me stoop. (4.1.41-46)

マテアはフランス人について、彼らは好色であると考えている。彼女は、ポルトガル人についても、自分にもポルトガル人の血が流れている事を認めつつも、フランス人と同様に否定的な感情を持っている。しかし、彼女は母方の血統を自身のアイデンティティとして選択しており、他の二人の姉妹も同様に、血統が有するネガティブな影響力は彼女たちには見当たらない。マテアは母親がイングランド人であるから、自分もイングランド人であると言う。彼女たちは父のポルトガル由来のアイデンティティを認めたくは無く、イングランド人と結婚することで、子供は完璧なイングランド人となることを目指したいという思いがあると考えられる。彼女の父親は正真正銘の外国人であるが、彼女たちに対しては、ヴァンダルたちに行っているような揶揄するような描写は無い。しかし父は娘たちがイングランド人と結婚することには反対である。⁽⁷⁾

本作品には人物間の関係性そして事件性には国籍が関わっている。様々な国籍の外国人が登場し、それぞれの人物は求婚者として、イングランド人のライバルたちに勝つべく画策していた。外国人たちがイングランド女性を獲得するという事は、外国からの侵入者の優位を許すものと捉えることができる。ピサロの3人の娘、ローレンシア、マテア、マリナは、外国人とイングランド人の両方の血統を持っているが、彼女たちはイングランド人の母親の血統を重視しているのは明白である。

4. ハイブリッド化するロンドン

*Englishmen for My Money*には市民喜劇の特徴として実在のLondonの地名がいくつか登場する。その一つがThe Royal Exchangeである。金融という側面からは、イングランドはオランダやイタリアに先を越されており、アルマダの海戦で覇権を得た次になすべきことは貿易、金融でも優位に立つことであった。

16世紀の為替業務を行っていた主要な場所は、ロンドン、ベルギーのアントワープ、フランスのリヨン、北イタリアのジェノヴァ、ヴェネチア、フィレンツェなどの都市であった。中でも最も金融技術が発展していたのはアントワープであった。中世では債権の第三者への譲渡には否定的であった。アントワープでは手形の流通において進んだシステムを有していた。当然為替手形は手形振出人と資金の供給者が契約当事者であり、手形代金支払人と受取人は契約履行の代理人に過ぎなかった。従って手形が不払いになった場合には、受取人は振出人を訴える事は出来ず、資金供給者が指図を取り消すことも出来た。

16世紀になるとアントワープのハンザ商人やイングランドの商人 (Merchant Adventurers) は債務証書を持参人している者に支払うことになった。アントワープ市場の動きに対してジェノヴァ、フィレンツェ、ナポリ、ヴェネチアなどのイタリア諸都市は18世紀に至るまで裏書きは禁止されていた (楊枝61-62)。債権譲渡、裏書きの生成、手形の流通証券への転換、微利の公認はその後の近代的貨幣流通の基となった。現物決済から裏書き手形の流通への変化は迅速で多額の資金を必要とする取引を可能とした。

金融市場は、一つの国際市場であり、このことはイギリスの富よりはるかに巨額の大陸の富が、イギリス政府および民間の事業者への融資のために導入されることが可能となることを意

味する。イギリスの商人たちはヨーロッパの商業中心地と為替手形を用いて通常取引をしていたため、イギリスの金融市場はほとんどアントワープ市場の海外支店であった。ロンドン・シティーの信用以上には金を借りることができなかったが、アントワープの元首であったスペインの国王は、信用取引により支払い能力以上の金をアントワープで借りることができたのである (Clark 78-79)。

アントワープでは1507年に、持参人条項が付された約束手形の所有者に、本来の債権者と同等の権利が法的に認められた。これは約束手形の流通を飛躍的に促進させることになった。アントワープの取引所の入り口には「民族、言語の如何を問わず、あらゆる商人の使用に当てて」との箴言が掲げられていた。市民や外国人に自由な取引環境を認めた事がアントワープを発展に導いた。そのアントワープはスペイン支配に対する反抗の拠点であったため、1581年にスペインの攻撃により陥落し、その裏書きや割引のような金融技術は、北部ネーデルランドの商業都市へ移住した多数の商人たちによってアムステルダムを中心で開花したのである。トマス・グレシャム (Sir Thomas Gresham, 1519-1579) は、ロンドンに王立取引所をアントワープの建物に模して開設したと言われている。しかしイギリスの商業や金融が、外国人の支配下にあることに対する国民感情による、外国為替への偏見ないし無理解のため (田中51)、イングランドの金融システムそのものは遅れを取っていた。

外国人の求婚者たちの一人はオランダの出身であり、またもう一人はイタリアの出身である。アムステルダムは商品取引の要所で、北イタリアも交易の要所であった。貿易や金融の華々しい土地を連想するような求婚者たちの存在は、外国に対してイングランドが感じる警戒心の一端と捉えることも出来る。彼らの言語的な弱みを揶揄することは、外国人が優位に立つことは許せないという意識の表れであろう。

フリスコはオランダ人に偽装しようとするが、“But soft, how shall I do to counterfeit the Dutchman, because I speak English so like a natural.” (3.2.104-05) と英語がネイティブに劣らないのでどうやって偽装するか悩む。フリスコは、ハイアムにDutchmanはどのようなかを聞く。オランダ人は頭が大きいだけでは無くまぬけ (“Then there’s not only a growte head, but an ass also.” (3.2.111)) と、ハイアムが言えば、フリスコは、寝取られ男の頭には角が生える (“What be you? You be an English ox to call a gentle moan ass.” (3.2.112-13)) と、ハイアムがローレンシアをヴァンダルに取られそうになっていることを皮肉る。⁽⁸⁾ エマ・スミス (Emma Smith) はロンドンを外国人たちに支配される女性と捉え、本劇は完全無欠なロンドンが混血化するのを阻止しようとするイングランド人の戦いであるとする (178)。本作品ではオランダ人のヴァンダルが最も貶められる対象となっているが、これはヨーロッパの金融の中心地であったアムステルダムに対して、外国資本の流入によるイングランド経済のハイブリッド化 (多国籍化) を避けたいとの意識が働いているのではないだろうか。

5. Jewと呼ばれないユダヤ人

ポルトガル出身であるピサロはそれまでの演劇に登場するユダヤ人とは違い、絶対的な悪役としては描かれてはいない。彼がユダヤ人であると思わせる記述はあるが、明確にユダヤ人であると言う記述は無い。『ヴェニスの商人』 (The Merchant of Venice, 1594) のシャイロック (Shylock) や『マルタ島のユダヤ人』 The Jew of Malta (1590) のバラバス (Barabas) のよ

うな絶対的な悪役ではないが、彼は求婚者たちと同様に騙され、嘲笑される対象である。なぜ彼はユダヤ人を想像させる外見や職業を持ちながら明確にユダヤ人とは記述されていないのだろうか？ ピサロはイングランド人の土地を担保に貸金を行っている。借金が返せなければ土地はピサロのものになるのだが、ユダヤ人や外国人は土地所有を禁じられていたため、彼は表面上、デニズン (denizen) として商売をしていたものと思われる。外国人の身分のまま、土地を担保に取るような商売を大々的にしていたとは考えにくいからである。

16世紀の外国人 (stranger) という言葉は、通常は話し手の所在地以外の所から来た人物を指した (Alford 117)。ロンドンにおいては臣民 (subject) でないことを指す。ロンドンの人々にとって外国人は競争相手であったため、外国人に与える経済上の権利はしばしば問題となった。ロンドンの市民権を得ることにより、土地の購入や、財産を相続させることが可能になった。そのために帰化またはデニゼーション (denization) が行われた。帰化は生まれながらのイングランド人と同等の権利を得られるのに対し、デニゼーションは外国人を法的に市民とする手続きである。それにより、土地店舗の購入が可能になるなど、いくつかの不利益は解消された。

ピサロの容貌については、ユダヤ人であることを想起させる次のような記述がある。

Harvey. Good reason so, it leads to Cruched Friars Where old Pisaro and his daughters dwell. (1.2.5-6)

Walgrave. and then put o'er his snout,
Able to shadow Paul's, it is so great. (1.2.15-16)

Harvey. Signore Bottle-nose? (3.2.1)

ユダヤ人のコミュニティがあったとされるCruched Friarsに住んでいること、セントポール寺院を隠せるような大きな鼻、そして前述の独白にもあるように手広く貸金を行っている様子から、彼は明確にユダヤ人とは呼ばれていないが、隠れユダヤ教徒 (marrano) であったと考えられる。劇冒頭の独白でピサロは自身のことを、“by birth I am a Portingale” (1.1.11) と述べている。1580年、ポルトガルがスペインに併合されると、ユダヤ教徒たちは厳しく追及され、彼らは隠れユダヤ教徒として海外へ移り住んだ。『ヴェニス商人』(The Merchant of Venice, 1596) は、ポルトガル系ユダヤ人Roderigo Lopezの女王暗殺未遂事件 (1594) の後に書かれたとされる。イングランドのマラーノに対する目には厳しいものがあつたことは、それらの劇中に登場するユダヤ人を見ても想像に難くない。しかし、本劇では蔑まれる対象は外国人たちあるためにピサロはユダヤ人色を薄められているのではないだろうか。

ピサロは3人のイングランド人たちに、金を貸した上に悪く言われることに腹を立て、次のように反論する。

Pisaro. Good morrow? now I tell you gentlemen,
You wrong and move my patience overmuch,
What, will you rob me, kill me, cut my throat,
And set mine own blood here against me too?
You huswives? Baggages! or what is worse,
Wilfull, stubborn; disobedient.
Use it not gentlemen, abuse me not,

Newgate hath room, there's law enough in England. (4.1.120-27)

私から奪え、自分の喉を掻き切れ、⁽⁹⁾とピサロは言う。あなたたちは借金を返さなければ監獄に行くこともできる、イングランドにはそのような法もある、のである。1552年に制定された徴利に関する法令で利息を取ることは公に認められたが、一旦廃止になり1571年に復活し、10%を超える金利は禁じられた。徴利を悪とするのではなく、徴利を公認し、上限を設けたことは前述の手形の裏書譲渡、流通性の発展とともに、中世貨幣市場のからの重大な転換点であった。ルネサンス演劇における金銭の問題はまさにこの転換点における、人々の戸惑いが映されたものだといえる。

ピサロは借金を返せないイングランド人たちに次のように言う。

Heighham. Be not so testy, hear what we can say.
Pisaro. Will you be wived? first learn to keep a wife,
Learn to be thrifty, learn to keep your Lands;
And learn to pay your debts too, I advise, else. (4.1.128-131)

どうしたら妻を娶ることができるかを考えたらどうだ？金持ちになって、土地を維持して、借金をかえすことを考えたらどうだとピサロは言う。ピサロの指摘は、家柄が良くても経済的な裏付けの無いイングランド人にとっては凶星であった。イングランドの伝統的な価値観が経済構造の変革の前に崩れ落ちた瞬間である。

ウォルグレイヴはピサロに次のように反論する。

Walgrave. What else, what Lands, what Debts, what will you do?
Have you not Land in mortgage for your money?
Nay, since 'tis so, we owe you not a penny.
Fret not, fume not; never bend the brow:
You take ten in the hundred more than law,
We can complain: extortion, simony,
Newgate hath room; there's law enough in England. (4.1.132-38)

ウォルグレイヴはピサロに、借金のカタに自分の土地を取っているのだから、金を借りていることにどうこう言われる筋合いはないという。イングランドでは19世紀中頃まで債務を支払うことが出来ない者を収監する債務者監獄があった。また、法外な利息を取る者を収容することも出来た。ピサロは実際には22%もの利息(5.1.32)を取っていたのである。強欲で聖職売買(simony)による利得と同じであり、法外なことをするピサロに対し、監獄に入るのとはそっちだとウォルグレイヴいう。“simony”は道徳劇に頻繁に登場する役柄である。劇中には“Royal Exchange”、“City”など当時の経済の中心を表す実在の地名が登場し、近代的な経済システムの萌芽がその背景としてあるのだが、中世からの倫理感も残っており、借金がらみの劇での既定路線ともいえる“usury”への非難は依然として残存している。

本作品ではRobert Wilsonの*Three Lords and Three Ladies of London* (1581) で三人の淑女たちが外国人の求婚者を拒絶したのと同様に、外国人に対するイングランド人の嫌悪感の一端を見

ることが出来る。エリザベス朝後期には経済的な発展とともに起こった様々な歪を描いた作品が数々登場したが、ロンドンの経済悪化の根源としてそれらの作品に登場する外国由来の人物たちの中で、もっとも嫌悪の対象とされたのはユダヤ人であった。彼らは急速に貧富の差が広がる経済の下、あくどい商法を行う典型として妬みと卑下の対象とされたのである。しかし本作品に登場するピサロは、外見はユダヤ人の特徴を備えてはいるが、絶対的な悪役として蔑まれることはない。しかし、借金を返せなかったために、イングランド人の土地が取られることに対して、ロンドンの観客たちが嫌悪感を抱いたのは想像に難くない。彼は絶対的な悪役ではないが、強欲なユダヤ人というステレオタイプをホートンは捨て切れずにいる。

しかしピサロが絶対的他者ではないのは、彼が言語的にロンドンに同化していることから明らかである。他の外国人の商人と比べて、アクセントに外国人の痕跡がない。外国人求婚者たちのグロテスクな英語と比べるとピサロの英語はひどくはない。ピサロは言語という見地から見れば、外国由来でありながらロンドンに同化しているといえる。しかし彼はシャイロックが娘ジェシカ (Jessica) に、バラバスが娘アビゲイル (Abigail) に裏切られたのと同様に娘たちに騙されてしまうのである。娘たちはピサロに明日結婚させられそうになり、アンソニーに助けを求める。アンソニーはローレンシアにアンソニーに偽装することを提案し、ローレンシアはピサロの家を抜け出すことに成功するのである。ローレンシアが偽装して家を抜け出したように、欺く手段として劇中で度々偽装が行われる。ウォルグレイヴは女性を装いスーザン嬢 (Mistress Susan) として入ってくる。ピサロは気づかず、"she is a sweet, smug girl." (4.3.21) と気に入った様子である。彼が心を動かした女性の正体は、娘を結婚させたくないイングランド人だったのである。このように娘やそのイングランド人の求婚者の偽装により、ピサロは騙され嘲笑の対象とされてしまう。ピサロは絶対的他者では無いとしても、生粋のイングランド人と全く同等の立ち位置では無いのである。

ウォルグレイヴはピサロを "father" と呼び (5.1.283)、マテアとの結婚を許してくれるように頼むが、騙されていたことが分かり、娘を返せとピサロは怒る。商売仲間のムーア (Moor) は次のようにピサロを宥める。

Moor. Master Pisaro, 'tis in vain to fret
 And fume and storm, it little now avails.
 These gentlemen have with your daughter's help,
 Outstripped you in your subtle enterprises.
 And therefore, seeing they are well descended,
 Turn hate to love, and let them have their Loves. (5.1.287-94)

ムーアはピサロに、怒っても無駄で利益にならない、イングランド人求婚者たちは生まれがよいと、経済力より生まれを取った彼女たちの選択を支持する。そして憎しみを転じて彼らを愛し、娘たちが結婚できるようにピサロを説得する。彼女たちはイングランド人と結婚することで、より完璧なイングリッシュネスを手に入れようとしているのである。そうだとすると、なぜ自分はじっと見ていないといけないのだ、と納得できないピサロであるが、娘たちは父親の言うことは聞かず、自分の意思を持つであろう ("Is it even so; why then I see that still, / Doe what we can, Women will have their will." (5.1.295-96))、と最後には諦める。一般的には家父長制においては結婚する娘たちの意思よりも、父親の意思が尊重される。しかしピサロ

は洪々ながらも娘たちの意思を尊重する。最後にピサロが娘たちの選択を認めたのは唐突にも思える。しかし不動産の継承権がデニズンの子たちには認められておらず、彼らの身分の不安定さを考慮すれば、娘たちがイングランド人と結婚すれば、土地は子に引き継がれてゆくのであり、ピサロにとって受け入れがたい結果ではなかったといえる。

結局、ピサロは直接的にはイングランド人たちに貸した金を回収できなかった。しかしその原因は娘たちが自分たちの意思を通したことであり、ユダヤ人であることを原因として理不尽に取り上げられたわけではない。イベリア半島を追われてきたセファルディム系のユダヤ人 (marrano) が多数ロンドンに居住しており、彼らはスペインの情報を持っており、また資金力もあったため、イングランドではルネサンス演劇でユダヤ人が貶められているほど、実際にはマラーノたちの立場は悪くはなかった。ピサロは王立取引所で情報を得、商人のネットワークを駆使し、商船の動向にも気を揉むといった、国際貿易の最先端をゆく商人の一人として描かれているが、一方、中世からの金銭に纏わる道徳観を以て攻撃の対象とされている一面もある。娘たちやその取り巻きに騙され笑いの対象とされていることを考慮すれば、経済システムが近代化への脱皮を図ろうとしても、舞台上でのユダヤ人金貸しの役柄は、根本的には変わっていない。それは取りも直さず、全ての外国人に開かれた市場への警戒感がロンドンの人々の間に根強く存在していることと無関係ではないと考えられる。

6. おわりに

*Englishmen for My Money*は混血である娘たちのアイデンティティの選択の問題を、ロンドンの商人たちの排外感情、そして軍事のみならず経済的にも国力が増したイングランドの人々が深めた自信をスージ上で演じることにより、イングランド人であることの誇りを改めて観客に訴えるものである。シャイロックはキリスト教徒を金で支配下に置こうとした。シャイロックはユダヤ教徒であることが全面に出ているが、ピサロは信仰については明確な記述は無い。ルネサンス演劇でしばしば問題となったキリスト教徒とユダヤ教徒とのせめぎ合い、カトリック教徒への嫌悪というものは影を潜め、作者ホートンにとっては、一番の関心事は宗教よりも国籍、そしてそれを象徴する母語であるといえる。

ピサロはシャイロックやバラバスのように絶対的な悪役ではない。しかし最終的に娘たちは父のユダヤ人としてのアイデンティティを捨て、イングランド人の妻となることを選んだ。それとともに、彼女らの結婚により夫となる彼らの借金をピサロは回収できなくなる。最後は会食し、大団円を迎えているが、ピサロはシャイロックと同様に娘も金も失うことになる。しかしシャイロックはユダヤ教徒であることが他の人物たちとの軋轢となり、金銭面では道徳観を問われる要因となったのに対し、ピサロは、ユダヤ人であることを理由にして、他者として排斥されることはない。外国由来の人々は経済力ではなく、英語の習熟程度により社会的地位を決定付けられている。ピサロやフリスコの語はイングランド人と遜色無いため、彼らは絶対的な排他的対象ではない。しかし最先端の金融の中心地であるロンドンのシティで仕事をするピサロも、従来の劇に高利貸しとして登場するステレオタイプのユダヤ人から脱却しきれてはいない。演劇ではロンドンの人々の脅威の対象は、悪役の定番の強欲なユダヤ人から、経済的な軋轢の対象であり、現実の脅威である外国人たちへと移りつつある。その中でも、イングリッシュネスを英語という言葉を通して、自国民の誇りとして捉えようとしたのは特筆すべきこと

である。イングランド人のみならず外国人に対しても洗練した英語を求めることは、経済面のみならず文化面でもイングランドの優越を誇示するものである。

注

- (1) 海軍大臣一座 (Admiral's Men) によりローズ座 (Rose Theatre) で演じられたことが、Philip Hensloweの記録によってわかっている。(Kermode, "Introduction" 40)
- (2) 1565年にSir Thomas Greshamにより、ロンドンの商取引の中心地として機能するように、アントワープの取引所を模して設立された。
- (3) イベリア半島でやむなくキリスト教に改宗したユダヤ人。イベリア半島に居住するユダヤ人は反感、迫害を免れるためにキリスト教に改宗し、スペイン人キリスト教徒 (旧キリスト教徒) に対して新キリスト教徒となった。1492年ユダヤ人追放令により約20万人のユダヤ人が周辺諸国へ移住した。イングランドではユダヤ人が1290年に追放され、1656年に再入国が認められるまでは公式にユダヤ人はいないものとされてきたが、実際には周辺諸国から来た隠れユダヤ教徒たちのコミュニティが存在した。
- (4) 本劇の引用と行番号は、Haughton, William. "Englishmen for My Money or A Woman Will Have Her will." *Three Renaissance Usury Plays*, edited by Lloyd Edward Kermode, Manchester UP, 2009, pp. 165-274. による。なお日本語訳は拙訳である。
- (5) 1593年のロンドンに居住する外国人を彼らの母語別みると、Dutch/German: 55%、French:34%、Italian:3%であった。(Luu 100)
- (6) この頃英訳された聖書には、Geneva Bible (1560)、Bishops' Bible (1568)、The King's Version (1611) がある。
- (7) 外国人とイングランド人との間の結婚については、父がイングランド人、母が外国人の場合、子供はイングランド人として認められるが、外国人の父とイングランド人の母との間の子供については帰化をすることは難しかった。父親の国籍に子供の国籍が左右される傾向があった。(Smith 176)
- (8) 妻に浮気をされている夫の頭には角が生えると言われている。Shakespeareの作品*Othello* にもOthelloはDesdemonaがCassioと浮気していると信じ、頭が痛いと言ってハンカチを頭に結んでもらう場面がある。
- (9) ビサロは、ユダヤ人が "cut throat dog" と呼ばれていることを逆手に取って、相手に自分の喉を掻き切れと言っているのである。"cut throat dog" はユダヤ人を形容する言葉として、『ヴェニス商人』を始め、演劇にしばしば登場する。

Works Cited

- Alford, Stephen. *London's Triumph: Merchant Adventures and the Tudor City*. Penguin Books, 2018.
- Balbo, Honathan. "Economic Nationalism in Haughton's Englishmen for My Money and Shakespeare's The Merchant of Venice." *Multicultural Shakespeare: Translation, Appropriation and Performance*, vol.13 (28) . U of Lodz, 2016, pp.51-67.
- Bartolovich, Crystal. "London's the Thing: Alienation, the Market, and Englishmen for My Money." *Huntington Library Quarterly* 71, 2008, pp.137-56.
- Baugh, Albert C. and Thomas Cable. *A History of the English Language*. 3rd ed. Routledge & Kegan Paul, 1978.
- Clark, G.N. *The Wealth of England from 1496 to 1760*. Oxford UP, 1946.
- Crawforth, Hannah. Sarah Dutagheer. *Jennifer Young. Shakespeare in London*. Billomsbery, 2014.
- Cohen, Walter. *Drama of a Nation: Public Theater in Renaissance England and Spain*. Clapham, John. *A Concise Economic History of Britain, From the Earliest Times to 1750*. Cambridge UP, 1963.
- Decker, Thomas. *The Shoemaker's Holiday*. Ed. Jonathan Gil Harris. Bloomsbury, 2008.
- Griffin, Eric J. *English Renaissance Drama and the Specter of Spain: Ethnopoetics and Empire*. U of Pennsylvania P, 2009.
- Gross, John. *Shylock: A Legend and Its Legacy*. Touchstone, 1994.

- Haughton, William. "Englishmen for My Money or A Woman Will Have Her will." *Three Renaissance usury plays*, edited by Lloyd Edward Kermode, Manchester UP, 2009, pp.165-274.
- Hawkes, David. *The Culture of Usury in Renaissance England*. Palgrave, 2010.
- Hoenselaars, A. J. Images of Englishmen and Foreigners in the Drama of Shakespeare and His Contemporaries: A Study of Stage Characters and National Identity in English Renaissance Drama, 1558-1642. London and Toronto: Associated University Presses, 1992.
- Howard, Jean E. *The Theater of a City: The Places of London Comedy, 1598-1642*. U of Pennsylvania P, 2007.
- Jones, Norman. *God and the Moneylenders: Usury and Law in Early Modern England*. Basil Blackwell, 1989.
- Kermode, Lloyd Edward. *Aliens and Englishness in Elizabethan Drama*. Cambridge UP, 2009.
- . "Introduction." *Three Renaissance Usury Plays*. Manchester UP, 2009.
- . "Money, Gender, and Conscience in Robert Wilson's *The Three Ladies of London*." *Studies in English Literature, 1500 – 1900*, vol.52, no.2, Spring 2012, pp.265-91.
- Lockyer, Roger. *Tudor and Stuart Britain 1471-1714*. Longman, 1964.
- Luu, Lien Bich. *Immigrants and the Industries of London, 1500–1700*. Routledge, 2005.
- Mithal, H.S.D., editor. *An Edition of Robert Wilson's Three Ladies of London and Three Lords and Three Ladies of London*. Garland, 1988.
- Munday, Anthony, et al. *Sir Thomas More*. Edited by John Jowett. Bloomsbury, 2011.
- Porter, Stephen. *Shakespeare's London: Everyday Life in London 1580-1616*. Amberley, 2011.
- Smith, Emma. "So much English by the Mother: Gender, Foreigners, and the Mother Tongue in William Haughton's *Englishmen for My Money*." *Medieval and Renaissance Drama in England* 13, 2001, pp.165-81.
- Stewart, Alan. "Euery Soyle to Mee is Naturall: Figuring Denization in William Haughton's *Englishmen for My Money*." *Renaissance Drama New Series*. vol. 35, 2006, pp.55-81.
- Wilson O. Claught. "The Broken English of Foreign Characters of the Elizabethan Stage." *Philological Quarterly* vol.12, 1933, pp.255-68.
- Wilson, Robert. "Three Ladies of London". *Three Renaissance usury plays*, edited by Lloyd Edward Kermode, Manchester UP, 2009, pp.79-164.
- 田中生夫『イギリス初期銀行史研究』日本評論社, 1966.
- 中川順子「近世ロンドン社会における外国人受容と外国人の法的地位」『文学部論叢』第107号（歴史学編），2006, pp.11-22.
- 楊枝嗣朗『イギリス信用貨幣視研究』九州大学出版, 1982.

Abstract

This paper discusses the following points concerning William Haughton's city comedy, *Englishmen for My Money* (1598), based on Haughton's perceptions of language and the social and economic conditions of the time. What did "Englishness" mean for the marriage of the daughters of the Portuguese Jewish merchant and usurer Pisaro? In addition, though Pisaro is not called a Jew, how does he differ from the Jews who have appeared in the plays before this one? He wishes to marry his three daughters—Laurentia, Marina, and Mathea—to well-meaning foreign suitors, but the daughters choose English suitors. Having won Battle of Armada, England's next task was to achieve market dominance. England's commercial rivalry with foreign countries can be seen in the presence of suitors associated with a flourishing land of trade and finance. Although the play represents a new way of life for Jews in the context of economic development, fundamentally, the role of Jewish Pisaro does not change that much from other Jews depicted in the Renaissance dramas before. The play emphasizes the English language as a sign of England's glory, and it is noteworthy that the

drama attempted to capture “Englishness” from the cultural aspect of language.